

2 章

まちづくりの目標

1. まちづくりの目標
2. 将来都市構造
3. 取り組みの視点

2 章

まちづくりの目標

1. まちづくりの目標

第5次那覇市総合計画では、人々が支えあう中で、愛着と誇りを持ち、自慢の那覇市を築いていくため「なはで暮らし、働き、育てよう！笑顔広がる元気なまち NAHA ～みんなでつなごう市民力～」をまちづくりの将来像に掲げています。

総合計画の将来像実現のために、市民アンケートやワークショップの意見、本市の課題などを踏まえ、今後20年間の都市整備に関わる9つの「まちづくりの目標」を定めました。それぞれの目標が実現した将来の本市は、次のようなまち・暮らしが実現しています。



魅力あふれる
コンパクトなまち

(1) 魅力あふれるコンパクトなまち

沖縄県の県都として多くの人々が訪れ、様々なモノや情報、出来事が集まる求心力の高いまちとなっています。また、市内各地域は、それぞれ特徴のある「歩いて楽しいまち」となっており、人々は地域の個性を活かした多様なライフスタイルを送っています。



だれもが
移動しやすいまち

(2) だれもが移動しやすいまち

バス、モノレール、LRTなどの公共交通網が充実した利便性の高いまちとなっています。自転車道や歩道の整備も進み、多様な交通手段を選択することができるクルマに頼りすぎない生活を送っています。



みんないきいき
暮らせるまち

(3) みんないきいき暮らせるまち

地域コミュニティの拠点などが充実し、年齢、性別、出身、障がいの有無などによらず、すべての人が暮らしやすいまちとなっています。また、まちなかのバリアフリー化・ユニバーサルデザイン化が進み、身近な公園では子育てや健康づくりをより気軽に行っています。



自然ゆたかな
水とみどりと花のまち

(4) 自然ゆたかな水とみどりと花のまち

自然に触れ合うことができる公園や海辺・川辺のウォーターフロントが整備され、まちなかには四季折々の花があふれた憩いとうるおいのあるまちとなっています。また、自然環境が保全され、水と緑のネットワークの形成により、生物多様性が確保されています。

(5) 那覇らしい歴史や文化の薫るまち

世界遺産首里城跡や地域の身近な歴史的・文化的な遺産を保全・活用し、那覇らしい歴史や文化が薫るまちとなっています。また、まちなかのオープンスペースでは音楽や演劇、パフォーマンスアートなども盛んで、芸術・文化と身近にふれあうことができます。



那覇らしい
歴史や文化の薫るまち

(6) 観光・経済が躍動するまち

経済の中心として、活気あふれる商業空間や魅力的なオフィス街が形成され、日々様々なビジネスイベントや商談が行われるなど、経済が躍動するまちとなっています。観光客は快適に観光地を巡ることができ、地域の人々との交流も盛んです。また、新たな観光スポットも次々と生まれています。



観光・経済が
躍動するまち

(7) 災害に強くしなやかなまち

不燃化や耐震化が進み、災害が発生しても被害が大きくなりません。また、自主防災組織などが活発に活動し、自助・近助・共助・公助がスムーズに連携することで、人々の生命を守ることができるまちとなっています。



災害に強く
しなやかなまち

(8) 人と地球にやさしいまち

再生エネルギーなどの技術の活用、魅力的なオープンスペースの創出、緑化などが進み、環境配慮型の市街地が形成されています。また、できる限り二酸化炭素を排出しないライフスタイルが確立し、環境に優しく快適な都市生活が送れるまちとなっています。



人と地球に
やさしいまち

(9) 持続可能な都市経営ができるまち

公共施設をはじめとした都市基盤は、良質な都市の資産としてのストックが進み、柔軟な利用により、未来に引き継げる持続可能な都市経営ができるまちとなっています。また、民間活力や新たな技術を取り込み、暮らしを豊かにする工夫が行われています。



持続可能な
都市経営ができるまち

2. 将来都市構造

本市は、コンパクトな市域に住宅や商業、業務などの様々な都市機能が広がり、自衛隊基地や米軍施設を除いたほぼ全域で土地利用がなされています。これまでに、モノレールの整備やモノレール沿線での大規模な土地区画整理事業、駅周辺での市街地再開発事業などによる都市基盤の整備を行ってきましたが、慢性的な交通渋滞をはじめ、人やモノの集中に対応しきれていない現状があります。一方で、市外への若い世代の流出や、中心部や都市基盤の整っていない地域での人口減少の動きも見られます。本市の人口は減少に転じることが予測されており、都市の活力を維持していくために、更なる高齢化の進展も見据えた、持続的な発展が可能な都市構造を構築していく必要があります。

市内各地域の特性やこれまで整備されてきた都市基盤を活かし、都市機能が集積した利便性の高い拠点の形成と、県内・国内外からのアクセスや拠点間、地域内の移動に対応する基幹的な公共交通網の構築により、公共交通を軸とした都市構造への転換を目指します。また、市内の各地域においては、地域の成り立ちや個性を活かしたまちづくりを進め、コンパクトな市域ながら様々な暮らし方が選択できるまちを目指します。

市内には、空港、港、バスターミナルなどの交通結節点、首里城跡や識名園をはじめとした歴史・文化遺産、ウォーターフロントや緑豊かな公園などの貴重な自然環境があり、様々な都市機能を活かしながら、暮らす人・訪れる人双方に魅力ある空間づくりを目指します。

市街地を取り囲む水辺や公園、地域に残る緑地は都市の生活にうるおいを与える貴重な自然環境として、保全や創出を図ることで、レクリエーション、景観、環境、防災など、多様な機能の相乗効果を生むまちを目指します。

まちづくりの目標実現に向けて、都市を構成する要素を「ゾーン」「都市の拠点」「都市の軸」の3つでモデル化し「将来都市構造図」を描きました。



① ゾーン

「ゾーン」は、地域の特徴の面的な広がりや都市の形成において期待される役割を表します。「複合機能ゾーン」、「都市型居住ゾーン」、「庭園型居住ゾーン」、「ウォーターフロントゾーン」、「交易交流ゾーン」の5つに区分し、ゾーンごとの暮らしの実現を目指し、土地利用の誘導を図ります。

名 称	役 割（暮らし・生活の風景）
複合機能ゾーン	県都として沖縄県全体の経済を牽引し、日常・非日常問わず必要なモノ・コトが揃うとともに、創造的な活動や暮らしが実現できるゾーン
都市型居住ゾーン	公共交通をはじめ生活利便性が高く、日常的なモノ・コトが不自由なく揃い、快適な暮らしが実現できるゾーン
庭園型居住ゾーン	自然環境を身近に感じ、落ち着きのある成熟した市街地が形成され、日常的なモノ・コトが適度にそろい、ゆとりを楽しむ暮らしが実現できるゾーン
ウォーターフロントゾーン	海辺や川辺空間を活かした観光・交流機能やオフィス機能が集積し、都市的環境と自然環境の両方を活かした暮らしが実現できるゾーン
交易交流ゾーン	臨港・臨空の地理的ポテンシャルを活かした物流機能や観光・交流機能など、多様な機能が集積することで相乗効果を発揮し、都市活動を支えるゾーン

② 都市の拠点

「都市の拠点」は、人・モノ・コトが集積した求心力のある場所を表します。都市機能の集積による「中心拠点」、「副次拠点」、「地域拠点」と、特徴的な商業施設の集積による「商業拠点」、資源の集積による「歴史・文化拠点」、「自然・レクリエーション拠点」、人・モノが交差する「交通拠点」の7つに区分します。体系的な拠点の整備・誘導を行い、持続的な成長・発展や生活の質の向上を図ります。

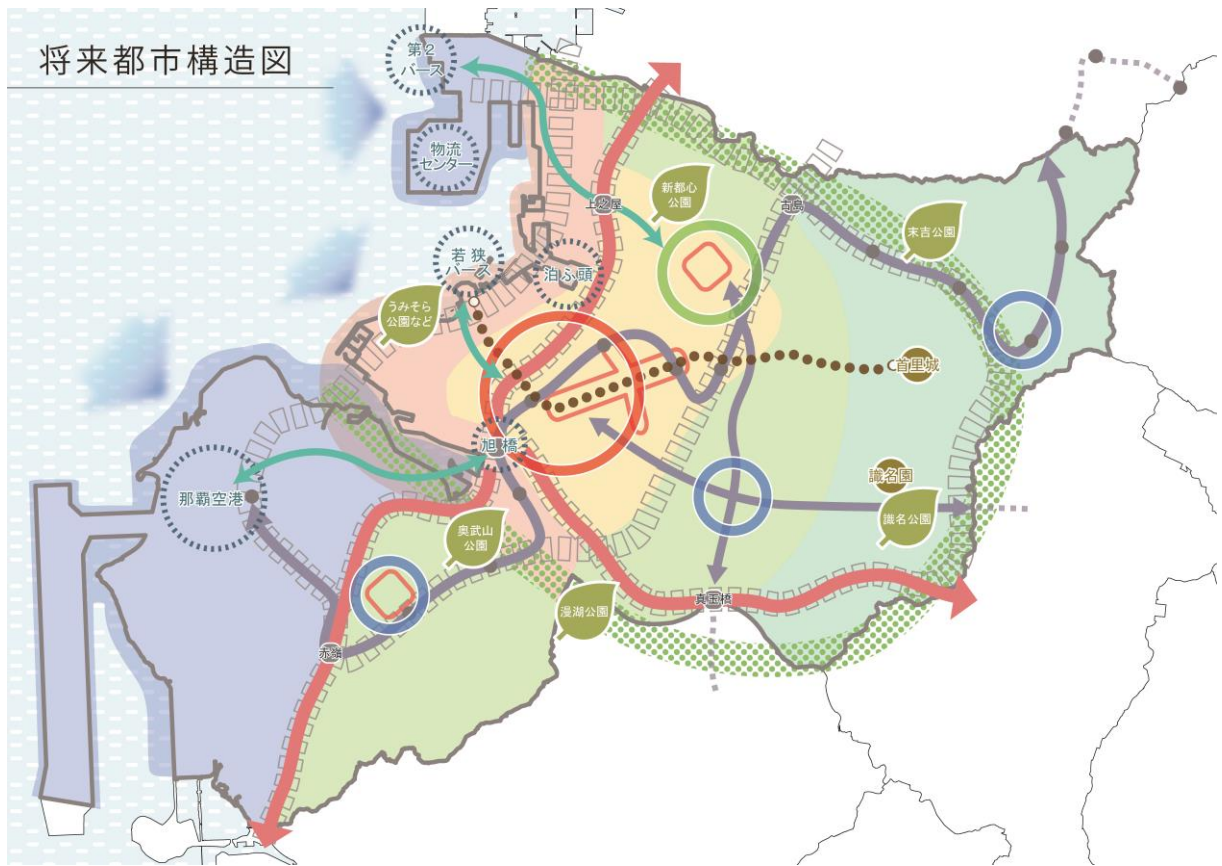
名 称	役 割
中心拠点	広域的な商業機能や観光・交流機能、文化芸術機能、業務機能、行政機能などが高密度に集積し、沖縄県および本市の経済、産業などの中枢的な役割を担う拠点
副次拠点	中心拠点の機能を補完する役割を有する拠点
地域拠点	地域の交通の起点で生活利便に資する機能が集積する拠点
商業拠点	特徴的な商業施設としてにぎわいと活力が集積する拠点
歴史・文化拠点	様々な歴史・文化遺産を有し、本市の文化の拠り所となる拠点
自然・レクリエーション拠点	緑や水辺などの自然環境を活かしたレクリエーションの拠点
交通拠点	空港・港など、本市のゲート空間として人・モノが集積する拠点

③ 都市の軸

「都市の軸」は、都市の骨格を表します。人やモノの流れのネットワークである「都市の活動軸」、公共交通によるネットワークの「広域都市軸」、「地域連携軸」、「交流補完軸」、本市の歴史的な骨格である「シンボル軸（シンボルロード）」、自然要素による骨格である「水とみどりの骨格」の6つに区分します。それぞれの軸の形成により、都市活動の基盤強化を図ります。

名 称	役 割
都市の活動軸	人やモノが行き交い、広域的な交通需要を支える都市の骨格を表す道路軸
広域都市軸	本市と周辺都市をつなぐ広域的な公共交通軸
地域連携軸	市内や隣接市町の拠点間をつなぐ、主に地域内の移動を担う公共交通軸
交流補完軸	県外・国外の玄関口である空港や港などと、市の中心部をつなぐ公共交通軸
シンボル軸 （シンボルロード）	本市の歴史・文化の展開軸 （港町那覇と王都首里をつなぐシンボルロード）
水とみどりの骨格	環境・景観・レクリエーション・防災などの機能を持ち、都市を支える自然環境の骨格

将来都市構造図



ゾーン

- 複合機能ゾーン
- 都市型居住ゾーン
- 庭園型居住ゾーン
- ウォーターフロントゾーン
- 交易交流ゾーン

都市の拠点

- 中心拠点
- 副次拠点
- 地域拠点
- 商業拠点
- 歴史・文化拠点
- 自然・レクリエーション拠点
- 交通拠点

都市の軸

- 都市の活動軸
- 広域都市軸
- 地域連携軸
- 交流補完軸
- シンボル軸
- 水とみどりの骨格

3. 取り組みの視点

本マスタープランは、ハード面からのアプローチによるまちづくりの目標や方針を定めるものですが、各分野のまちづくり方針への展開や個別具体の施策に取り組む際に基本となる考え方を、「視点」として定めました。

(1) 多様な主体との協働を進める視点

第3次那覇市総合計画や平成11年に策定された都市計画マスタープランに、「市民との協働」や「パートナーシップのまちづくり」が位置づけられて約20年が経過しました。協働する主体は、市民、NPO、企業、教育機関など多様になっています。また、協働のかたちも、計画づくりへの参加から、施設の維持管理、まちづくりイベントの共催など、多岐にわたっており、これからのまちづくりにおいても、多種多様な協働の視点を意識します。

(2) 都市の価値創造の力を向上させる視点

近い将来、本市の人口は減少に転じる一方で、しばらく人口増加が続くと予測される市町村もあります。「まちづくりは人づくり」。コンテンツではなく、人に魅力を感じ、人が集まり、まちづくりにつながります。都市の活力を維持するうえで、都市がもつイメージをアップさせ、「このまちが好き」と多くの人に感じてもらうために、価値創造の力を向上させる視点を意識します。

(3) 時代を超えて未来へつなげるまちづくりの視点

拡大の時代から縮小の時代へ。日本のまちづくりは大きな転換期を迎えています。これまでのまちづくりの常識は通用しない大きな変化の波が押し寄せて来ると言われています。このような時代において、その時々潮流に目を向けながらも、時代を超えて未来へつなげるまちづくりの視点を意識します。

(4) 広域都市圏や県都としての連携と分担の視点

本市の市街地は市域の境界を越えて、周辺の市町村と連担した市街地を形成しています。通勤・通学・買い物などの日常生活圏は広域化しており、都市機能の配置や総合交通体系の整備などは広域的な視点での取り組みが重要となります。広域都市圏として、近隣市町村との連携と県都としての役割をバランスよくもった、連携と分担の視点を意識します。